

第 53 回 IRIDeS 金曜フォーラム

日 時：平成 30 年 5 月 25 日（金）16 時 30 分～18 時 30 分

会 場：東北大学災害科学国際研究所棟 1 階 会議・セミナー室（仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1）

テーマ：災害研のビジョンに向けて

1. 16:30-16:55 （発表 25 分）

タイトル：災害研が今後果たすべき役割とは

話題提供者：丸谷 浩明（人間・社会対応研究部門 防災社会システム研究分野）

発表要旨

災害研設立から 6 年、体制もほぼ固まり、実績を振り返れるようになった。この時点で、災害研のビジョンとして果たすべき役割を論じたい。東日本大震災の教訓を発信し次の大災害に活かすことは、研究分野にかかわらず柱の一つと考える。また、所員数は十分多くはないが、この数がそろふこともめったにないので、相互に連携して研究の幅を広げ、実務にも近づけたい。地域貢献と海外発信を大変だが両輪で続けることが重要と考えている。

2. 16:55-17:20 （発表 25 分）

タイトル：「公助・自助の拠点管理」と共助について～共助の発展と「多岐亡羊」の時代～

話題提供者：守 茂昭（一般財団法人 都市防災研究所）

発表要旨

阪神淡路大震災以降、自助・共助の防災の必要が叫ばれ 20 年以上が過ぎた。自助・共助の防災は、担い手次第で手段や行動が変わる防災であり、行政が一律にその活動内容を掌握しコントロールすることは困難である。しかし、その掌握しにくい自主防災活動に、行政さえ力の及ばなかった防災活動を託したとき、防災の担い手は、その期待にどこまで答えるであろう。自助・共助の担い手は、自分の得意な分野でしか力を発揮できない現実がある。それは中央政府や地方自治体の思う期待と比べ必ず開きが生ずる。そのギャップに配慮しないまま、理想の防災担い手論を夢見続ける政策が時として目に余る東日本大震災以降の数年間である。

3. 17:20-17:45 （発表 25 分）

タイトル：低頻度巨大津波の実態解明に向けて

話題提供者：後藤 和久（災害リスク研究部門 低頻度リスク評価研究分野）

発表要旨

災害研のビジョンの一つ「地球規模の自然災害発生とその波及機構の解明」に関係して、2011 年東北地方太平洋沖地震津波のような、発生頻度は低いものの甚大な被害が生じうる低頻度巨大津波の実態解明やハザード評価がどこまで進んでいるのか、最新の研究成果に基づき東日本太平洋岸を中心に概説する。また、知の集積の重要性や津波リスク評価の課題についても議論したい。

4. 17:45-18:10 （発表 25 分）

タイトル：心理社会的支援の観点から考える歴史資料レスキューの意義

話題提供者：上山 眞知子 & 佐藤 大介（人間・社会対応研究部門 歴史資料保存研究分野）

発表要旨

本報告では、歴史資料レスキューで救済された文書とその所有者を対象として行った歴史学と心理学との共同研究の結果について述べる。

国際支援の現場では、心理社会的支援が注目されている。歴史的には新しいアプローチで、2007年に国連およびWHOから支援のガイドラインとして公表されたものである。ガイドライン作成の母体は、国連関連機関と世界的なNGOの代表を含む28団体から成る機関間常設委員会（IASC）の作業部会である。できるだけ被災者の日常生活の中に支援を溶け込ませることが推奨され、特定の精神疾患にのみ着目した支援では、他の問題を見過ごす可能性のあることを指摘している。

被災地の自家の歴史資料の所有者には高齢者が多い。東日本大震災によって、住居や地域に被害を被った人々は、自家の歴史に関する文書等にも被害を受け、先祖からの継承という拠り所も失った可能性があった。高齢者にとっては、心理的なダメージは大きかったものと推測される。歴史資料レスキューは単に文書を再生するにとどまらず、所有者にとっては、先祖からの歴史的な継承を取り戻すものとなった可能性がある。被災した資料所有者への聞き取りによって、歴史資料レスキューの心理社会的支援としての効果の検討を行っている。

5. 18:10～18:30 質疑／総合討論（20分）

司会・進行：丸谷 浩明（人間・社会対応研究部門 防災社会システム研究分野）